

「国連機関で働くおもしろさとやりがい」
国際基督教大学高等学校キリスト教週間マルチイベント
参加報告

日時：2018 年 6 月 6 日（水） 午前 10 時～午後 12 時

場所：国際基督教大学高等学校図書館

AFICS-J 参加者： 山本和副会長，森田宏子会員，山崎節子会員，高瀬千賀子執行委員
ICU 高校生の参加数：全員 2 年生 48 名（元々の定員 40 名から増加）

背景： ICU 高校については、昨年 9 月始業式後、SGH プロジェクトの初めてのケースとして、AFICS-J から山本と森田が国連勤務の経験に基づくプレゼンを 3 年生の全生徒を対象に実施し、高い評価を受けたが、今年も支援の要請を受けた。これを受け、山本が 4 月 18 日に ICU 高校と協議し、1) キリスト教週間の「マルチイベント」への参加；2) 7 月 14 日の終業式のあと、3 年生対象に国連に関する講演を行う；3) 生徒のアメリカ研修の際にニューヨークで「国連学習」を行うの 3 点について協力することになった。（4 月 18 日付の山本からの報告を参照；但し、3 つ目のイベントは少人数のため国連ツアーのみを実施することになり、AFICS-J の関わりはなくなった。）この報告書は第 1 点のキリスト教週間中に同時並行で行われた「マルチイベント」の中で希望者を募って行われた「国連機関で働くおもしろさとやりがい」というテーマのイベントに関するものである。ICU 高校生の特徴は半数以上が帰国子女であること、駐在先が英語圏に限らず、多様なことである。

準備の経緯： 山本や森田が更に ICU 高校の先生方と協議し、このイベントの関係者全員を含めたメールの交換などで、準備を進めた。与えられた 2 時間のうち、前半の 45 分ほどは山本からのパワーポイントを使った講演、残り 3 人の自己紹介と休憩後、後半は生徒主導の パネルディスカッションということになった。生徒主導は参加生徒達の中から司会を決め、生徒達からの事前アンケートの回答を元に行われた。事前アンケートでは：1) あなたはどんな理由でこのイベントを選びましたか；2) あなたが聞いてみたい質問を 3 つあげてください；3) あなたはこのイベントを通して何を知りたい/得たいと思っていますか、が問われた。山本のパワーポイントには国連の基礎知識が盛り込まれ、あとは国連に入るまでの経緯や様々な体験が含まれていた。このパワーポイントのコピーとスピーカー 4 人の略歴は事前に全員に配布された。

生徒からのアンケートの回答を纏めると、1) 国際機関で働こうと思った動機・国連の役

割；2）具体的な仕事内容；3）一番大変だったことと印象に残っていること；4）学生時代の過ごし方（特に ICU 時代）、勉強の仕方；5）異文化間でのコミュニケーション・人間関係；6）途上国開発についての問題、の6点が主流という結論になったが、1と2はそれぞれの自己紹介に組み入れるということで、ICU 高校と進行の調整をした。

ICU 高校側では、司会に参加者の中から山村彩吹さんと大竹日和奈さんが決まり、原教頭先生を通して、彼女達と進行の打ち合わせをして頂いた。

イベント概要： 当日は、予定通り、山本のプレゼンテーションが40分ほど、その後、質疑応答を経て、パネリストの自己紹介を行った。パネルディカッションは生徒の司会に沿って進んだ。最初は参加生からの質問が出にくく、司会の生徒さんがアンケートの結果多くの生徒が関心のある質問を代表してパネリストに聞いていたが、その内に参加している生徒から、英語を交えたより具体的な質問が出るようになった。アンケートで出てきた、「何が一番大変だったか」という質問から始まり、「英語はどの程度必要か」、「他の言語は必要か」など、かなり具体的な質問も多く、実際に今後の勉強の仕方、進路の方向性を考えている様でもあった。また、「大学で学んだことと仕事の関係」、「学生中にしておいたほうが良いこと」など、これからの高校・大学生活を有意義に過ごしたいという様な意欲も伺えた。パネルディカッションは予定を過ぎて12時15分ぐらいまで行われた。その後も生徒の何人かは、直接パネリストや山本へ質問を続けていた。

纏めと評価： 生徒からの感想文を読むと、国連の仕事が具体的にわかって良かったという意見が多かった。直接国連で働いた体験を聞くことで、国連が身近な存在になったと感じた生徒も多かった様だ。また、ICU 高校の特徴かもしれないが、英語を使って仕事をしたいと思っている生徒が多く、そういう生徒達に、異文化の環境の国連の仕事上求められる英語能力、相手を尊重しながら意思疎通を図るコミュニケーションの取り方、専門分野を極める必要性、logical thinking の大事さを伝え、具体的な仕事の方向性を考える機会を与えることができたことは有意義だった。「夢や希望を持っていれば、一つのことが次のことに繋がっていく」「途上国でのボランティアや国際機関でのインターンシップの可能性を大学生になったら追求していく」「国連は大変ながらもやりがいがある仕事のようなのだ」などなど、我々の発言から何かを得た生徒が多かった様だ。これらの感想を読むと、我々のメッセージはそれなりに伝わっていた様に思われるのは、我々に取っても嬉しい事だ。

国連の全体像を理解できる様なプレゼンテーションと2-3人による異なる職種や国際機関での体験を話すことができるパネルとの質疑応答の組み合わせは良いパターンだったと思う。それと共に、一方的な講義に限らず、生徒主導の要素、対話中心、参加型の機会が生徒

達にとってさらに印象的なものになった感があった。そのためには、事前アンケートや生徒主導の体制をどう取るかなど対象校と十分な協議及び準備を必要とするが、今後もこのような可能性を探ることはお勧めする。

以上